

かたりべ118

豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備だより



開館当初の収蔵資料展示室(右上) 開館当初の小学校団体見学への説明(右下) 別室で説明後、展示室へ移動していました

郷土資料館の長期休館にあたって

豊島区立郷土資料館は、『豊島区史』の編さん事業を引き継ぎ、区に関する歴史、民俗などの貴重な郷土資料を収集・保存し、調査・研究し、展示する地域博物館として、一九八四(昭和五九)年六月一八日にオープンしました。開館約二週間前の六月五日付『豊島新聞』では、「郷土資料館完成へ」という見出しのもと、「郷土資料館を単なる通史的、教科書的なものではなく、庶民の生活感あふれる大胆、意欲的な展示とする」という郷土資料館開設準備委員会による基本的方針が紹介され、あわせて、「ややもするとアカデミックになりがちな、この種の資料館の運営を『先人の遺した遺産を前に楽しく気軽に語り合える』にはどうしたらよいか、運営面が今後の課題となろう」と結んでいます(左上写真)。

以来三〇年余、展示会や講座・見学会などを開催し、多くの皆さまにご利用、ご参加いただきました。展示会では、アジア太平洋戦争をテーマにしたもの、集団学童疎開の実態を正面から扱ったもの、また、近代以降この地域が都市化する要因を様々な切り口で提示したものに注目いただきました。講座・見学会では、展示空間の狭さを補う試みとして、「そこに出る博物館」を掲げ、開館間もない頃から積極的にフィールドワークに取り組みました。川の痕跡こんせきや区境の道を参加された方々とたどり、新たな発見を共有することができました。

このたび、建物の老朽化に伴う大規模改修工事のため、郷土資料館は二月一日から休館しています。改修工事にあわせて常設展示室のリニューアル工事も実施します。リニューアルオープンは、約二年後の二〇一七(平成二九)年一〇月の予定です。この間区民の皆様にはご不便とご迷惑をおかけすることになりますが、ご理解、ご協力のほどよろしくお願いいたします

■事務所の移転先 二〇一六年一月二日(火) ↓

豊島区南大塚二一三六一二 東部障害支援センター内

(郷土 秋山・横山)

豊島区ミュージアム開設プレイベント第三弾

蔵出し！〜としまコレクション

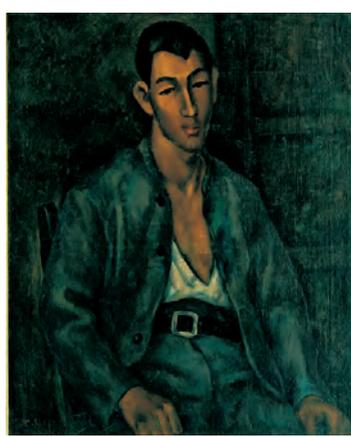
収蔵品展2016

来る二〇一六年一月二十九日(金)から二月五日(金)まで、豊島区庁舎一階としまセンタースクエアにて、豊島区ミュージアム開設プレイベント第三弾「蔵出し！〜としまコレクション 収蔵品展2016」を開催します。

ここでは、展示構成とみどころを少しだけご案内します。

●美術分野

里見勝蔵(さとみかつさう)は京都から上京し東京美術学校に入学、一九一六(大正五)年には現在の豊島区域に転居しました。豊島区に暮らした美術家の早い例の一人です。その里見が池袋在住期に二科会第四回展で初入選を果たしたのが、今回ちらしやポスターに掲載している《職工》です。胸を開け、もの思うように見える表情でこちらを見つめる顔つきは、セザンヌの感化があるとも言われています。



里見勝蔵《職工》1917年、油彩・カンヴァス

大正期の豊島区域は、一九〇三(明治三六)年に池袋駅が開業してしばらくたった頃で、学生にとっては安価に住むことのできる街でした。東京美術学校のあった上野からそう遠くないここ豊島区には、このころから多くの学生が暮らしていたのです。

関東大震災後に大勢の人々が当時の郊外だった府下北西部に移り住み、アトリ工賃貸家という形式が成立するのは一九三〇年代半ばのことです。そこでの芸術家たちの熱気に満ちた交流と空間は「池袋モンパルナス」としてよく知られるところですが、ところが、友達同士が下宿を歩き来したりあるいは入り浸る様子は里見の文章からもうかがえるため、池袋モンパルナスの盛り上がりと同様なこと、すでに一九一〇年代に繰り広げられていたことがわかります。

今回の展示では、まず「人のかたち、人の姿」と題して人物画や擬人化の表現に着目します。次に「思い出す風景」では往時を思い返して描かれたアトリ工村の様子に加え、今では考えられないくらいに広がっていた畑や牧場の風景、戦後直後の様子などもご覧いただけます。豊島区に関連のある作家たちのうちから、渡欧してパリのモンパルナスを描いた作品も初公開します。このモンパルナスへの憧れは、一九二〇年代に花開いた芸術

家たちの集った地・モンパルナスに池袋をなぞらえた「池袋モンパルナス」という言葉にもよく表れています。

美術分野の展覧会は九回目になります。「蔵出し！」は久しぶりの展示の機会です。その名の通り、蔵(収蔵庫)から出してきた作品の数々をじっくりとご堪能ください。(美術 小林)

●文学・マンガ分野

今回は、豊島区ゆかりの童話作家坪田譲治と童話雑誌『びわの実学校』同人、そして、その表紙絵を画いた版画家山高登を紹介いたします。

坪田譲治は、岡山県出身ですが、一九一六(大正五)年二六歳のときに府下北豊島郡高田町狐塚(現・豊島区西池袋)に新居を構え、以来この地を活動の拠点とするようになりました。作家としては、早稲田大学時代に小川未明を文学の師と仰ぎ、童話作家としては、童話雑誌『赤い鳥』主宰鈴木三重吉に師事します。戦前から戦後にかけて映画化された人気作もあり、一九三五(昭和一〇)年に発表した「お化けの世界」(『改造』改造社)や、一九三六(昭和一一)年に『東京朝日新聞』に連載した「風の子供」があげられます。

さらに、日本芸術院賞など多数の賞を受賞し、一九五六(昭和三一)年には日本児童文学協会会長に就任します。

また、一九六三(昭和三八)年には隔月刊童話雑誌『びわの実学校』を主宰、若手育成に尽力し、多くの実力派童話作

家を輩出します。一九七四(昭和四九)年には、創刊から一〇年の功績を讃えられ、朝日文化賞(朝日新聞社主催)を受賞しました。

そして、第二の『赤い鳥』と称されたこの雑誌の表紙を飾ったのが、版画家山高登です。山高が、『びわの実学校』表紙絵担当に抜擢されたのは、編集の仕事で出会った坪田に送った木版画の年賀状がきっかけでした。その絵に魅了された坪田が、自ら山高に依頼し、実現したといえます。

創刊号から第四九号までの表紙絵原画は、当時印刷業者に手渡されると山高に返却されることはなかったため、現存の確認はできていません。近年、第五〇号以降から終刊第一三四号までのうち六〇点が発見され、豊島区が収集しました。本展示では、三〇点を国内で初めて公開します。



『びわの実学校』創刊号～第134号

●郷土資料分野

郷土資料館には、区民の方から寄贈された多種多様な資料があります。今回は、それらを保管している「蔵」のなかから、

(文学・マンガ 荒川)

主に、一九五〇〜六〇年代の資料を中心に展示します。

小学生にとつては、むかしの同じ年齢の子どもの世界を知ることができれば良いでしょう。そして、この機会であれば体験できないこともあると思います。あるいは、同時代を知る人たちにとつては懐かしさとともに、次世代に伝えてもらいたい、と願うことがあると思います。

では、展示構成から、どのような資料があるか、見どころを紹介しましょう。

1 子どものくらし―遊び・勉強・生活
六年間、通った学校。いつも背中にあったランドセル。なかにはいつぱいの教科書と教材がありました。学校が終われば空地や路地でめんこ。冬の寒いときには家のなかで、おはじきやお手玉を使った女の子。その脇では、おばあさんが楽しそうに笑って見ていました。

2 ぐらしのうつりかわり
家には、まだ洋間が少なく、畳の部屋が多かった時代でした。ご飯や宿題、遊びも卓袱台でしました。冬の暖かさは、火鉢の火からもらいました。

テレビは、次第に白黒テレビからカラーテレビの時代になり、一九六四（昭和三九）年の東京オリンピックは、多くの人の記憶に残っています。また、今のように、既製服が店頭豊富に売られていたわけではなかったため、足踏みミシンで、子どものために服を作る光景が見られました。

いまだ、家の柱時計の音が、家族にときを知らせる時代でもありました。

3 としまの風景いまむかし

〜豊島区ビフォーアフター〜
一九四五年（昭和二〇年）四月三日の城北大空襲により、豊島区区域の約七割は焼失しました。その後、戦後の復興と急激な都市化が進むなか、私たちが目にする風景は日々変わりつつあります。

区内各所の景観がいかに変化し、私たちの生活がどう変わったのか、フィルムカメラで撮影したモノクロの写真は、デジタルカメラが主流となった今の社会に向けて、強烈なメッセージを発信しています。展示室内に映し出される画像をスライドショーでお楽しみください。

資料と友だちになろう

大きな資料は大八車。実際に、長崎地区の農家が野菜を神田市場へ出すときに使っていたものです。曳く重さを体験してみましょう。「荷車鑑札豊島区」というステッカーがついている戦前の資料です。

左右のバランスがとりにくい天秤棒（てんびんぼう）で、桶を運んでみましょう。その他、蓄音機でSP盤のレコードを聴く、紙芝居「ちいさい

桶」を見る、という企画等は、日時を決めて実施する予定です。

毎年一月末から二月初旬は、区内の公立小



人型めんこ

学校三年生が、学習のために資料館へ来る館する時期です。資料は、教材として大切に使われています。寄贈して下さる方がいて、それをご覧になる方がいるというのを心に、今後も、蔵からの贈り物をしたいと思っています。
(郷土 福岡・秋山)

●特別展示 鈴木信太郎記念館プレ展示

旧鈴木家住宅（豊島区東池袋五丁目）は、わが国のフランス文学研究黎明期に活躍した鈴木信太郎（一八九五―一九七〇）の旧宅で、二〇一〇（平成二二）年信太郎氏の次男道彦氏より寄贈を受けました。豊島区では、この貴重な

歴史的建造物を二〇二二（平成二四）年三月に豊島区指定有形文化財（建造物）に指定するとともに、二〇一七（平成二九）年度に「（仮称）鈴木信太郎記念館」を開設するための整備を進めています。記念館は鈴木信太郎の功績を顕彰するとともに、愛蔵した書籍や関連資料を展示・解説します。あわせて大正時代以来、

数度の増改築を経て今日まで住み継がれてきた住居、豊島区指定文化財「旧鈴木家住宅」を広く公開するものです。

本展では、記念館開館に先立つプレ展示として、フランス文学者鈴木信太郎とその旧宅「旧鈴木家住宅」を紹介します。鈴木信太郎は、一九二二（大正一〇）年から一九五六（昭和三一）年まで東京大学でフランス文学を講じ、日本におけるフランス文学・語学の研究体制を確立、門下から多くの逸材を輩出しました。と

くに、フランス近代の象徴派詩人、ステファヌ・マラルメ研究の第一人者として、重要な功績を残しました。

一九四三（昭和一八）年に東京帝国大学に提出した博士論文で、戦後になって出版された『ステファヌ・マラルメ詩集考』は、当時フランス本国でもまだ誰も手を付けていなかった先駆的な研究です。表紙に描かれている「半獣神」は、マラルメの有名な詩『半獣神の午後』の語り手がモテイーフになっており、信太郎とも親交のあった近代洋画家の須田国太郎によるものです。

フランスで限定出版された『半獣神の午後』の初版には、フランスの近代画家エドゥアール・マネによる挿絵が付けられています。信太郎は、この貴重な初版本を所持しており、後に、自らの日本語訳にマネの挿絵を付して、オリジナルにそっくりの本を作りました。

本展では、非常に珍しいこれらの書物の他、信太郎の人となりや交友関係が窺い知れる品々に加え、建物の見どころを幅六メートルの大型図面とともに展示いたします。



『ステファヌ・マラルメ詩集考』

(郷土 木下・古賀)

旧高田町の人口密り事情による都市化の影響への対策

豊島区では、大正から昭和期にかけての都市化にともなう人口は急増し、飲食店・食品市場などの拡大は、塵芥（以下、ゴミ）の量を倍増させ、伝染病患者さえも増やしました。主たる伝染病は、腸チフス、疫痢、赤痢、ジフテリア、猩紅熱などがあげられ、衛生の保全が課題となっていました。

明治三三（一九〇〇）年に汚物掃除法が發布され（昭和二九（一九五四）年清掃法施行により廃止）、市は公有地に対して「地域内汚物ヲ掃除シ清潔ヲ保持スルノ義務」（第1条）が定められ、さらに「蒐集シタル汚物ヲ処分スルノ義務」（第3条）を負うものとし、町村についても準用されました。この時から、ゴミとし尿の収集が地方行政の事務として位置付けられることになったのです。

さて旧高田町（雑司が谷・高田地域）では、ゴミの掃除および処分を営業者に委託し、各戸より一定の料金を徴収して処理していました。しかしながら、人口・戸数の増加によりその不徹底さに対して非難や苦情が相次ぎ、町営の取扱・処理を目指し、営業者に補助金を交付して無

	人口	収集ゴミ量	1日あたりのゴミ量	1人1日あたりのゴミ量
昭和6年・高田町	48,541人	4,759 t	8.4 t	173 g
平成24年・豊島区	268,725人	59,964 t	164.2 t	611 g

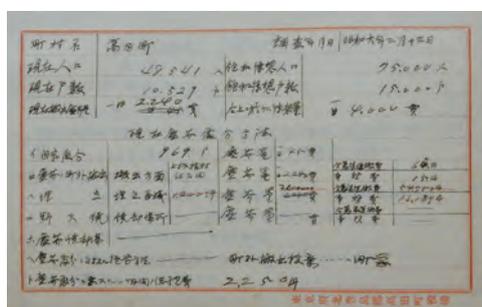
償で町に引き継ぐ契約をおこないました。大正一五（一九二六）年一月衛生委員会にて議決し、諸規程を設け、翌年三月汚物掃除法施行地域に指定します。同年四月には、町直営の塵芥取扱が実施となりました（『高田町史』昭和八年刊）。

表のように、平成二四（二〇二二）年度の統計によると、豊島区の人口二六万八七二五人に対し、ゴミの総量は五万九九六四t（資源ゴミを除く）で、一日あたり約一六四・二t搬出しています（『第三次豊島区一般廃棄物処理基本計画』等を参照、平成二六年三月刊）。一人あたりでは一日約六一gの計算になるそうです。

では当時のゴミの量はどのくらいだったのでしょうか。昭和六年に高田町が作成した「塵芥処分方法・方針概要調査報告」（館蔵「高田地区関連文書類」下段写真）によれば、人口四万八五四一人、戸数一万五二九戸に対して一日

あたり二二四〇貫（八・四t）のゴミを搬出していたことが書かれています（総量一二六万九一六〇貫（四七五九・三五t）は『高田町史』参照）。つまり、一人一日では約一七三gのゴミを出していた計算になります。

収集方法は、掃除人夫二〇名程度で各戸のゴミを収集して四輪馬車や手車に積載し、捨て場として「上板橋江古田」（現練馬区旭町）付近に借り入れた土地三反余歩（約二九七五㎡）に搬出して投棄していました。投棄の際には防臭・防虫の薬液を散布し土を掛け、監視をしていたようですが、それだけでは不十分であったのか、住民に対し殺虫剤の購入料金を支払っていたようです。



馬車輸送では敏捷性を欠くことから、ゴミの搬出を自動車でおこなう方法を検討していました（『塵芥搬出費用予算』。一日三台の自動車で作業し、これを平均五回

運搬して延べ一五台分を搬出。これに人夫が一台に対し五名ずつ配属し、自動車は帰着するまで各一台分のゴミを収集。戸数の平均は六七戸弱と見積もり、この方法ならば一日平均一〇〇〇戸の掃除ができ、月三回は各戸巡回できると書かれています。なお、自動車一台の積載量は、一人平均一回で藤籠に七個収集できる計算で、平均三五個となっています。

昭和七年四月、衛生委員は新たに「練馬村字東田島」（現練馬区貫井）に塵芥捨て場の予定地を設けることを決めました。その後、塵芥処理調査委員を選出し、各地の塵芥焼却場を視察させ、将来的には、人口七万五〇〇〇人、戸数一万五〇〇〇戸で、一日四〇〇〇貫（一五t）の搬出となる予想を立て、焼却場施設を大字高田字金久保沢（現目白一、三丁目）に設計することを計画していました。しかし、市郡併合により同年八月に計画を廃止し、東京市に引き継がれたのでした。

高田町の一大事業であった「下水道計画」については、すでに「かたりべ」一三号に掲載しましたが、町の衛生を保全するにあたり、ゴミ処理の検討は下水道と同様に町の重大な施策であったといえるでしょう。（郷土 高木）



現在豊島区では、鈴木信太郎の旧宅と

書斎に残された資料を調査しています。

その中からは、『ステファヌ・マラルメ

詩集考』の本来の原稿をはじめ、信太郎

に関する貴重な資料の数々が見つかって

います。そして先日、信太郎の書斎から

新たに、近代洋画家で、信太郎の『ポオ

ドレル詩抄』（青磁社、昭和二三年）

の装丁も手がけた川口軌外による水彩画

とデッサンが三点見つかりました。その

うちの二点は、『半獣神の午後』の挿絵

と思われるもので（図2、3）、一点は、

黒い背景に裸婦とMALLARME（マラ

ルメ）という文字が描かれています（図

1）。実は信太郎には、昭和二〇年代に、

川口軌外による挿絵で『半獣神の午後』

の豪華本を造る計画が持ち上がっていま

した。これらの挿絵は、実現には至らな

かったこの豪華本のために描かれたもの

なのかもしれません。（郷土 古賀）

※本欄は一部、鈴木道彦著『フランス文学者

の誕生』（筑摩書房、平成二六年）の記述を参照

しました。

鈴木信太郎の書斎にあるステンドグラ

スには、「世界は一冊の美しい書物に近

づくべくできている」という一節が綴ら

れています。これは、フランス近代を

代表する象徴派詩人、ステファヌ・マラ

ルメ（Stéphane Mallarmé, 1842-1898）

によるものです。詩的言語を極限にまで

探求して創作された彼の詩は、あまりに

難解で、発表当初から多くの読者を困惑

させてきました。しかし一方で、観念的

で、複雑な構造をしたマラルメの詩の、

美しく崇高な世界観は、今日まで世界中

の多くの芸術家や研究者を魅了し、新た

な芸術作品や画期的な研究の数々を生み

出してきました。

信太郎もまた、この詩人に魅了され、

重要な功績を世に残した日本人研究者の

一人です。彼の主著『ステファヌ・マラ

ルメ詩集考』がその証と言えるでしょう。



図1 川口軌外による挿絵「MALLARME」



図2 川口軌外による挿絵「半獣神とナンフ」



図3 川口軌外による挿絵「半獣神とナンフ」

これは、信太郎が一九四三（昭和一八）

年に東京帝国大学に提出した博士論文で、

戦後になって出版され、後に読売文学賞

を受賞しています。マラルメの詩につい

て可能な限り全ての異本を検討し、それ

らを厳密に比較し、本来の『マラルメ詩

集』とはどういうものかを探った研究で、

当時フランス本国でもまだ誰も手をつけ

ていなかった先駆的な業績です。

口絵には、エドゥアール・マネやポー

ル・ゴーガン、ホイットスラーといった、

名だたる画家たちによるマラルメの肖像

や、マラルメが最も凝った稀覯本「大鴉」、

『半獣神の午後』の初版のためにマネが

描いた挿絵、マラルメの自筆を写真刷に

した『ステファヌ・マラルメ詩集』の一

ページなど、信太郎が、パリのシャンピ

オン書店を通して蒐集したコレクション

が紹介されています。また、表紙に描か

れている「半獣神」は、マラルメの有名な

詩『半獣神の午後』の語り手がモチーフ

になっており、信太郎とも親交のあった

近代洋画家の須田国太郎によるものです。

この『ステファヌ・マラルメ詩集考』

に代表される、信太郎によるマラルメ研

究の業績は、信太郎の教え子たちに受け

継がれ、世界でも類を見ないほどの精密

な理解にもとづく詩人の全体像を実現し

ました。それが、一九八九（平成元）年

から二〇一〇（平成二二）年にかけて、

筑摩書房から刊行された『マラルメ全集』

です。全五巻から成るこの大作には、各

巻に別冊で、ときには翻訳本体を上回る

厚さの膨大な訳注と解説がついています。

編者はいずれも、信太郎に指導された戦

後世代の代表的フランス文学者で、第一

巻には、「この巻を亡き鈴木信太郎先生

に献げる」と記されています。

「旧鈴木家住宅」は、豊島区東池袋五丁目
に所在する歴史的建造物で、正確には「豊島
区指定有形文化財（建造物）旧鈴木家住宅」
という名称です。現在豊島区では、この建物
を改修・整備して「仮称）鈴木信太郎記念館」
を開設する取り組みを進めています。

豊島区ミュージアム開設イベント(第4弾)

「豊島ミュージアム講座」がはじまります

(仮称) 芸術文化資料館の開設プレイベントとして、昨年度から「豊島ミュージアム講座」を始めました。郷土資料、美術、文学・マンガの三分野の学芸員が講師となり、日頃の調査研究や作品資料についてわかりやすく解説します。昨年度は延べ一三三名の参加がありました。今回も共通テーマは設けず、豊島

区の歴史・文化の魅力を多様な視点から紹介することに主眼を置き、最終回には見学会を設けました。なお応募受付は、改修事に伴う事務所移転のため、来年一月一二日からとさせていただきます。皆様のご参加をお待ちしております。(郷土 横山)

回	開催日	講師	タイトル
1	2月20日(土)	甲田 篤郎	谷端川水源付近の変遷を探る ～新館建設予定地(千早二)の発掘調査から～
2	2月27日(土)	高木 謙一	雑司が谷の古文書を読んでみよう
3	3月5日(土)	清水 智世	画家・鶴田吾郎が見た戦前・戦中の風景 ～旅とスケッチと戦争と～
4	3月19日(土)	安達 愛	江戸川乱歩と豊島区ゆかりのミステリー作家たち
5	3月26日(土)	横山 恵美	【見学会】水窪川を知っていますか? ～川跡を歩こう～(約4km)

- 時間 第1～4回 午後2時～3時30分
第5回(見学会) 午後1時～4時
- 会場 豊島区立南大塚地域文化創造館 第1会議室
第5回のみ現地集合、現地解散
- 参加費 無料
- 定員 40名(第5回の見学会は20名) ※2回以上出席できる方
- 応募方法 「往復はがき」で申込み、応募者多数の場合は抽選。
詳細は、郷土資料館ホームページやチラシなどでお知らせします。
- 募集期間 **2016年1月12日(火) 厳守 ～ 2月6日(土)消印有効**
※2016年1月12日(火)から、下記に事務所を移転します。
それ以前の講座の申し込みはお受けできませんので、ご了承ください。
- 問合せ 豊島区文化デザイン課ミュージアム開設準備グループ
電話03-3980-3177(平日 午前8時30分～午後5時15分)

郷土資料館・ミュージアム開設準備グループ 事務所移転のお知らせ

- 移転先 2016年1月12日(火)～
〒170-0005 豊島区南大塚2-36-2 東部障害支援センター内
※展示室はありません
- 業務時間 月曜日～金曜日(祝日、年末年始を除く)
午前8時30分～午後5時15分
- 問合せ 郷土資料館 電話03-3980-2351

編集後記

「かたりべ」一一八号をお届けいたします。さて表紙記事の通り、郷土資料館は二月一日より長期休館いたします。ところで、豊島区に郷土資料館が開館した一九八四(昭和五九)年は、どのような年だったのでしょうか。この場を借りて少し振り返ってみたいと思います。

この年には、第二三回オリンピック・ロサンゼルス大会が開催されました(七月二八日)。柔道男子無差別級金メダルの山下泰裕の活躍などは、まだ記憶に新しいかもしれません。また、新札が発行となり、一万円札が福沢諭吉に、五千円札が新渡戸稲造(現在は樋口一葉、千円札が夏目漱石(現在は野口英世)のように、肖像に文化人が採用されるようになりました。他にも、宮崎駿による長編アニメ映画「風の谷のナウシカ」の封切りやエリマキトカゲ・コアラ・ラッコなど「動物ブーム」もこの頃でした。

区内でいえば、雑司が谷旧宣教師館を区の文化財として保存していくことが決定し(九月)、「豊島区情報公開条例」が可決したことなどがあげられます(一〇月)。

頭の片隅に残るような出来事もつい忘れがちになり、いずれは一つの「歴史」として位置づけられるようになるのでしょうか。(編集 高木)

かたりべ
No.118

2015年12月16日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4
豊島区立勤労福祉会館7階

電話 03-3980-2351

URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan/index.html>